家ありと見て来し藪や赤椿　五鳳
鶯にふり向もせぬ木樵かな　久栄
薪を折音さへ更て十三夜　雲嶺
月代に晴行空や帰り鴈　吾蝶
入船のつゝく艪音や春の月　暁月
庭の松見に出る朧月夜哉　丹鶴
きし鳴や隠るゝ所も見へぬ野に　川澄
盆過し寺や糸瓜の花盛り　清因
宵晴のまゝに夜明て霧の海　二兆
細き灯に客あしらひや玉祭り　豊丘
猿斗り正月着物着たりけり　水竹
つゝかなく初声配るからす哉　一羽
星合や灯にもさはらぬ竹の風　丘雨
台処へ来てもの問ふや秋の雨　涼川
只白くうねりも見せて湖の月　思明
をる念のとれて見安し草の花　南叟
名月や更行さとの人通り　机友
鶯の鳴や朝日のもるゝ枝　青楓
海の面しつかになりて雲の峯　嵯峨女
友ありて旅面白し月今宵　觴山
見る人に真向ふさまや遠案山子　寄竹
日頃見る遠山低しおほろ月　藻鏡
陽炎やはや掃まへの敷松葉　抱義
海苔の香やゆとりある間の膳好み　嵊舎
水音のすむ有明や梅の花　得蕪
樹は風のあるに平らや春の海　白外
地にけふる雨に巣を立すゝめ哉　壽
ひと漁に浜の寄進や涅槃像　卓郎
如月の隙や其日の空催ふ　完鴎
つまる夜のしつかやひたと鳴蛙　抱叔
紅梅や待得し雨のひと湿り　等栽
交り樹は伸て裾すく桜かな　莒磨
見掛れと巣へは未た来ぬ燕かな　波鷗
けさ色をあらはす雪の若菜哉　西馬
初蝶やいま蕣を蒔し庭　山子
腰掛て見る間にも干て海苔薫る　萬古
浅川の水もよこさす春の雨　きく雄
ふり〳〵や人の持ふり先まねる　永壷

緑峰更
懸峰更

桃の花庭に工みのなくてよし　鳥吟
いつとなく夜は明にけり朧月　叶
雪を踏山路も梅はさきにけり　魯心
こゝろより更る夜かちや春の月　素水
何か搗手杵のおとや朝の梅　尋香
はつ桜繕懸し戸口かな　探闇
雀子や日当りのよき神の木々　秀翠
高低も遠く見る野や木瓜の華　一昇
鴈鴨の音はいつ過て初さくら　花升
湖わたる往来やみけり雉子の声　杜誠
初花に移る心もおくれけり　樹石
小鳥鳴けふや雨にもはつさくら　禾丈
足もとの夜明を花のはしめ哉　見外
枝合ふて野路の明るし月と梅　香昇女
曇りともいふほとてなし花の空　不一
ひとおろし風にゆれけり暮の花　為山
初めなき物はなけれと種卸　瓦村
吹立て水の面ちるさくらかな　東子
余所に聞花は忘れぬ夕かな　小童 稲濤
黄昏や雨もさそふてちる桜　雨兮
空に知る色や深山の花さかり　龜汀
遠くとる水のかるさよ梅の花　悰父
求めすに道は開けて春の山　祖風
山添は水音もして春の月　内龜
初午や細き流れにわたし舟　守英女
花吹雪田つらの鷺を立せ鳧　かつら
いく度春のよき日うけてや松の花　卜早
鳴なから空をうらこふ蛙かな　由誓
畑道や花咲たれは覚えある　祖郷

安政四年弥生　抱節子書 ㊞